

〈論文〉

コロナ禍における感染防止型撮影実習ワークフローの考察

短編映画『バズれ！大根おろし』制作プロジェクトを事例として

島田英二*

Practical Workflow of Short Film Production During the COVID-19 Pandemic: Production Report of the Short Film “*Radish Girls*”

Eiji SHIMADA*

要旨

新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大期第3波の中、北海道情報大学情報メディア学部の映像表現系ゼミナール（島田ゼミ）では2020年9月から2021年3月にかけて実写短編映画『バズれ！大根おろし』（2021）を制作した。本稿では、このプロジェクトを事例にコロナ禍での撮影実習における感染防止対策および制作過程の諸問題をまとめ、今後適用できる感染防止型の撮影実習ワークフローについて考察する。

Abstract

During the third wave of coronavirus in Japan from September 2020 to March 2021, Eiji Shimada’s seminar (Faculty of Information Media, Hokkaido Information University) produced the student short film, *Radish Girls* (2021) under Japan’s COVID-19 production guidelines. This study shows the practical workflow of student short film production in school under pandemic restrictions, following infection prevention guidelines and utilizing online communication technologies.

キーワード

映画制作 (film production) 短編映画 (short film) 新型コロナウイルス (COVID-19)
ワークフロー (workflow) 感染防止 (infection prevention) ガイドライン (guidelines)

* 北海道情報大学情報メディア学部 准教授, Associate Professor, Department of Information Media, HIU

1. はじめに

北海道情報大学情報メディア学部情報メディア学科に所属する筆者のゼミナール（以下島田ゼミ）では毎年、札幌国際短編映画祭への出品を目標に15～20分程度の短編映画を制作している。2019（令和元）年度における短編映画『Vampire Bus Stop』の制作は本学紀要（第33巻第2号）に報告した通りであるが、制作期間の一部が新型コロナウイルス感染拡大第1波と重なった。ただし撮影は終了していたため、制作全体から見ればコロナの影響は編集期間にスタッフが集まれないといった控えめのものであった。一方、本稿で取り上げる2020（令和2）年度の短編映画制作では、企画から準備、撮影、編集、完成まで全工程が新型コロナウイルス（第2波・第3波）の影響を受けて行うこととなった。結果として作品は無事に完成することができたが、その過程では制作の延期をはじめ様々なオンラインツールの試用、制作手法の変更、感染防止ガイドラインに則った安全な撮影方法の模索などがあり試行錯誤の多いプロジェクトとなった。本稿ではこのようなパンデミック状況下で感染防止対策をとり工夫しながら短編映画の制作を行った本学の短編映画『バズれ！大根おろし』（2021）制作プロジェクトの事例について詳細をまとめ、今後適用できる感染防止型映像制作の撮影実習ワークフローについて考察する。

2. プロジェクトの流れと感染拡大

本プロジェクトは以下の流れで行った。

- ①企画開発、②プロット開発、③脚本執筆、
- ④プリプロダクション、⑤撮影、⑥編集、
- ⑦映画祭への参加

プロジェクトの目的は2021（令和3）年10

月に開催される第16回札幌国際短編映画祭へ出品するための作品制作と映画祭への参加である。2020年は4月11日に新型コロナ第1波（ピーク時の国内陽性者数は720人/日）があり、4月7日には新型コロナウイルスによる影響で初めて緊急事態宣言が発出された（図1/Yahoo!ニュース 2022年1月13日）。その後一旦収束するよう見えたが8月7日には第2波のピークで国内陽性者数が1,605人/日となり、2波のピークを前に7月22日に開会式を予定されていた東京オリンピック2020の延期が政府から発表された。

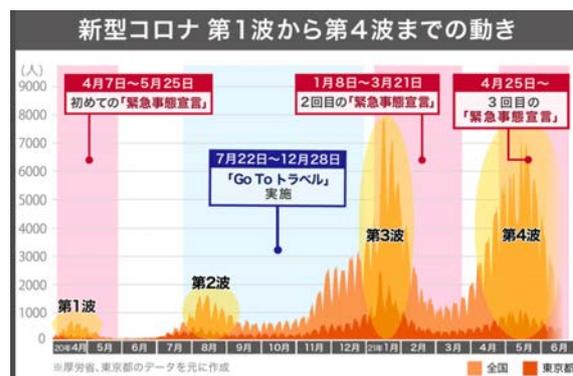


図1 新型コロナウイルス 第1波から第4波までの動き

この時期本学では、学長、環境衛生・疾病予防対策委員会、安全衛生委員会が迅速に対応し、2月27日付で新型コロナウイルス感染防止に向けた本学の基本指針が通知された。第1波中の2020年度4月は前期授業の開始を4月27日まで延期させ対面授業禁止期間を設定(5月31日まで)、授業は学生を登校させない遠隔授業となった。対面授業は6月1日から感染予防に十分配慮のもと可能となったが、感染拡大リスクの軽減から引き続き遠隔授業の推奨も継続され、いつでも遠隔に切り替えられる「遠隔と対面のハイブリッド授業」も認められた。前期授業が終了し、夏休み期間に入る8月上旬に第2波のピークを迎えた。後期以降の授業への方針は前期末と同様であったが、第3波の中11月7日に新型コロナウイルスに関する北海道の警戒ステージが「3」に引き上

げられ、再び遠隔授業のみの運用となった。この対応は感染状況に応じてその都度延期され、最終的に後期終了まで継続されたため、本学では2020年11月9日から2021年1月29日までの間、原則すべての科目において遠隔授業のみとなった（第3波のピークは1月8日で国内新規陽性者数：全国7,957人/日、同日全道181人/日）。本プロジェクトは2020年9月から開始し、2021年3月に終了したため、期間的にはコロナ第3波の中でのプロジェクト遂行となった。プロジェクトの各工程について以下に詳しく述べる。

3. コロナ下でのゼミ運営

3-1 オンラインでのゼミ運営

2020年度、本プロジェクトの主構成員となる島田ゼミ3年生は9名、4年生は7名であった。前述の通り本学の2020年度の前期授業が「遠隔授業のみ」で始まったため、新ゼミ生は初回のゼミがオンラインとなりZoomミーティングを使用して行った。Zoomは使用したことのない人や、自宅のインターネット環境によってうまく動作しない場合もあるため、4月の授業開始前に2回接続テストを行った。もともと島田ゼミでは、映像業界に就職していくために求められる人材像として、「自分から主体的に意見を言って確認や指示をできる人間」、「間違えても言うてみる人間」を育てたいという教育理念があった。そのためカリキュラムの中にプレゼンテーションやグループディスカッション、ロケ撮影などアクティブ・ラーニングが多く設計されていたが、果たしてコロナ禍によってゼミが遠隔授業になったときに、目標とする授業の質が担保できるのか、特にこのような中で密になりやすいグループワークでもある短編映画制作の撮影実習が、（周囲に理解される安全観のもと）展開できるのだろうかという不安があった。実際に

2020年の前半はテレビドラマや映画の中止や延期が相次いでいた。本プロジェクトの目標である映画祭というものもカンヌ映画祭をはじめ世界中で中止や延期の決定がされていた。

3-2 ゼミでのオンラインツールの使い方

遠隔授業の内容を対面授業の質に近づけるためには、リアルタイム双方向でビデオ会議システムを使用しカメラオンで取り組むのが望ましいのではないかと筆者は考えていた。しかし実際にテストをしてみると、カメラをオンにすることで学生の自宅のインターネット環境によっては動作が重くなったり、自宅や自分の顔が映ることが恥ずかしいと感じる学生もいることがわかった。また学生にとっては他にも遠隔授業があるため、カメラをオンにすることで契約している月の通信量の上限に達してしまう問題が確認できたので、顔出しはスクリーンショットを撮る時や発表をする時とし、「可能な時以外は任意」「できればカメラオン」として運営していった。オンラインツールは島田ゼミではZoom、Microsoft Teams、Webex Meetings、Jitsi Meet、Spatial Chatなどを試したが他の科目でも使用機会が多く学生も慣れてきたZoomを使用することにした（図2）。

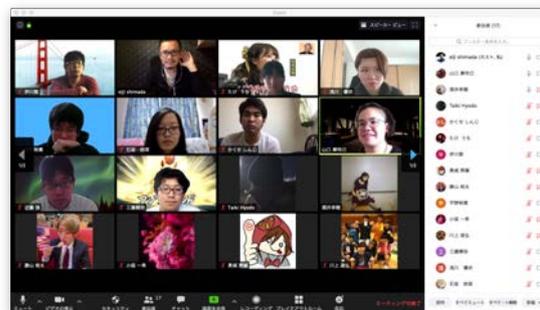


図2 Zoomを使用したゼミナール（第1回）

Zoomでのゼミ運営は、なるべくコミュニケーションの手応えが残るよう、最初に教員が1人1人と話すことのできる雑談タイムを設けるようにした。授業として見ると「効率の悪

い」運営となったがこれは映像制作におけるチームワークにおいて韌性（問題発生時に臨機応変に対応できるしなやかさ）のようなものが重要であると筆者が考えていたためである。前期を対面授業でスタートできなかったため人間関係の土壌が形成されていない弱点を補う目的があった。

Zoom の他にはゼミ全体のグループ LINE があるほか、本学の学習ポータル「POLITE3」に資料を掲載して共有することも可能であるため、予習教材や復習教材は POLITE3 にアーカイブして使用した。また POLITE3 へのアクセスを習慣化するため遠隔出席ボタンを POLITE3 に設けた。授業開始前にゼミ LINE で Zoom リンクを共有しリマインド、Zoom に入ってから POLITE3 での出席を促し、Zoom 使用中は Zoom のチャットも使用した。ゼミの内容は議事録担当者が Google ドキュメントにまとめ、ゼミ後に共有した。

3-3 ゼミ対面授業の再開

本学では 6 月 1 日から対面授業が可能となったが、ゼミ生にアンケートを取るとまだ登校に不安のある学生もいた。そのため島田ゼミの対面授業は二学期開始後からとした。また対面授業についても「段階的再開」とし、不安な人は来なくてもよいこと、いつでも遠隔授業に戻すというイメージで「一度、対面をやってみる」という理解で説明した(図 3)。

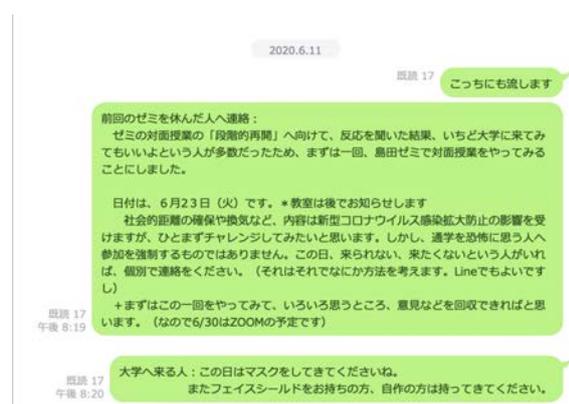


図 3 対面授業の開始についての案内 LINE (筆者記)

こうして 4 月に対面で始まる予定であったゼミナールは約 2 ヶ月の遠隔授業を経て 6 月 23 日に初めて「リアルで」顔合わせすることになった。

3-4 フェイスシールドコンテスト

対面授業の再開を前に学内で教職員向けに出された文書「2020 年度前期授業についての通知〈第 5 報〉」では、対面授業について以下のように記載されている(図 4)。この内容を学生に周知し、教員だけでなくゼミ生も意識を持ち、全員協力のもと感染予防対策を徹底した安全な授業運営を行いたいと考えた。

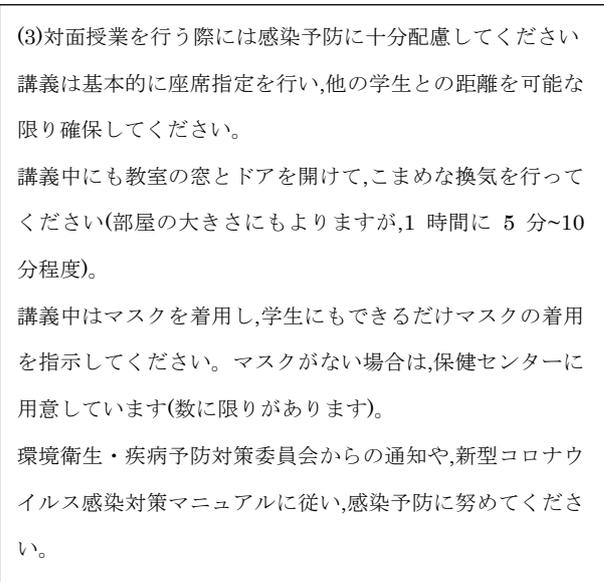


図 4 2020 年度前期授業についての通知〈第 5 報〉より

そしてこれらを当たり前遵守できるかどうか、ゼミで行う対面の撮影実習のチーム力を左右してくる。またこうした注意喚起の文言を教員が繰り返し伝えるだけでなく、できるなら向き合うべき当然のこととして自然な形で課題化していくことができないか。そして、どうにかしてこの「ニューノーマル」を楽しむことができないか? そうしたところから出てきたアイデアが「フェイスシールドコンテスト (FSC)」であった。これはショートフィルムコンテスト (SFC) のアナグラムから発

想しているが、もともと島田ゼミでは「ゼミノート」という、アナログなものづくり（ノート作り）の課題にも取り組んでいた。FSC ではオリジナルのフェイスシールドを自由に自作して対面授業の日に持ってくるというラフな仕切りで、楽しみながら感染対策を考えるきっかけとすることが目的である。まずはやってみたい有志を対象に、開催してみることにした。不安な人もいる中、「対面授業の初日」が少しでも楽しみで記憶に残るものになってくれればよいと考えた。FSC のエントリーは5名で、16名全体からすると人数は多くなかったが、2ヶ月間の遠隔授業を経て初顔合わせの機会に対しては十分なアイスブレイクとなった。この日は新ためて自己紹介も行い、FSC のインパクトもあって島田ゼミの 2020 年度の対面授業の始動を象徴する日となった（図 5）。



図 5 フェイスシールドコンテスト

最初の対面授業では自己紹介などの対面コミュニケーション、およびこれまでの遠隔授業・自粛期間の生活など思いや感情の共有に重きをおいた。そして全体のコンセンサスを取り、「対面授業で優先してやりたいこと」を話し合った。最も希望があったのは、カメラな

どの機材に直に触れる機材講習であった。

3-5 機材講習

機材講習は当初屋外で予定していたが、当日雨天となり急きょ体育館で行うこととした（図 6）。当時感染防止対策のなかではマスクや手指消毒の他に「3密」を避けることが大きく伝えられていた。3密とは、密閉・密集・密接を指し、「換気の悪い密閉空間」、「多数が集まる密集場所」、「間近で会話や発生をする密接場面」と定義されている（首相官邸 2020）。まず体育館で入り口のドアと複数の窓を開放することで通気を確保した。また体育館という広い空間に学習拠点を分散させた。たとえば体育館の四方にカメラコーナー、録音機材コーナー、照明コーナー、ドローンコーナーと分け、各所に講師が付き 2~3 人のグループがそれらをローテーションで回って学ぶオペ



図 6 撮影機材講習

レーションとした。3密回避の中の「密接」が特に難しく、最初はお互いに距離をとっていても、熱中するにしたがって学生同士の距離が近づくことがあった。これをどの程度まで容認できるかがこのような撮影実習の対面授業の難しさであった。特に講師役と学習者は機材を間に挟み近くで見せながら説明することも多く、教員からディスタンスについて注意することが多かった。また授業の中でどれだけ厳重にディスタンスを守ったとしても、ひとたび休み時間になれば学生どうしで自由に話をして交流するということが発生する。対面授業を実行するというはそのような可能性を含み、良い人間関係であればあるほど時間外交流が起りやすい。また機材講習では事前に機材のアルコール消毒と使用者の手指消毒を徹底しているが、複数人で機材を共有することも気になることであった。管理責任者としては心配が付きにくい状況であったが、100%ゼロリスクの管理を目標とするのではなく、いかに妥当な安全性を担保して実行するかという観点で見なければならなかった（そうでなければ撮影実習などやらないのが一番安全である）。学びを止めないという理念をもちつつ、コロナ禍の中で短編映画の制作実習を安全に行うための理論と方法論を整理する必要があった。

感染防止においては安全な社会的距離が「1～2m」と言われているが（厚生労働省 2020）、撮影実習においてはやむをえずこの距離が縮まる瞬間が発生すると思われる。そこで、コロナ禍における撮影実習においては、密接回避（社会的距離の確保）だけを安全性担保の指標とするのではなく、総合的に感染リスクをいかに下げるかという視点が重要である。そのためには、複数の感染予防対策を混在させ総合的に撮影実習での感染リスクをマネジメントすることが求められる。すなわち、①換気が十分であること、②全員マスクをすること、③

話す必要があるときは小声で話すこと、④事前事後に手指消毒をすること、といったリスク軽減の要素を複数同時に存在させることが肝要である。これらに加えて⑤フェイスシールドやビニールシートを適宜使用する。具体的な実習時の運用方法については感染防止対策の項目で詳しく述べる。ちなみに、この機材講習の開催前の2020年6月20日には北海道に出されていた緊急事態宣言が解除され、続く6月21日から本学の感染防止危機管理レベルが「2」から「1」に引き下げられた。本学の対面授業はレベル2でも許可されていたが、こうした安心材料となる情報は心理的に有り難かった。コロナ禍における対面授業の再開は、（リスクはゼロにはならないが）適切にリスクマネジメントをすることで教育の質を担保することに意義があり、危険と感じながら無理に断行されることではないからである。関係者に対して「安全に実習を行えそうだ」という情報共有や同意を得るプロセスを経ることが撮影実習の安心感、現場での信頼感につながると考える。

3-6 映画基礎演習の遠隔授業運営

同時期に行っていた他の映像系実習科目ではどうであったか。2020年度に筆者が担当した「映画基礎演習」（前期前半開講）は履修人数が54名であった。第1波の渦中であったため遠隔授業となり実施計画を例年から変更しているが、こちらは全回をリアルタイム双方向の遠隔授業で行うよう計画した。オンラインツールはZoomミーティングを使用し、学習ポータル「POLITE3」を課題指示や資料提供、課題提出の拠点として積極的に活用した。授業は録画し授業後にMicrosoft Teamsにアーカイブすることで復習も可能とし学習時間に柔軟性をもたせた。

「映画基礎演習」の内容は初心者向けであるが、ビデオカメラや三脚など撮影実習機材の

使用を前提として設計されている。本学のクォーター（4学期）制の前期前半（1学期）に開講され週に4コマ授業がある。この時期は2020年度のコロナ第1波中の登校禁止期間（4月29日～5月31日）と大きく重なり、3分の2の内容が登校禁止期間中に進行した。もともとアクティブ・ラーニングとして設計されていた本授業であるが、面識のない学生たちによるグループ制作を短期間に遠隔で行うことは破綻のリスクが大きいと判断した。そこで2020年度は実習単位を「個人」に変更し、自宅でスマートフォンやタブレットを使って動画編集アプリで確実に個人制作をしてもらう方が授業目標に到達できると考えた。個々が制作した作品はYouTubeにアップロードし、その限定公開リンクを共有することで提出する方式とした。これによって学生どうしも他の学生の作品を自分の環境で視聴することができる。こうして2020年度の「映画基礎演習」は、コロナ禍で撮影機材をカメラからスマートフォンに、撮影単位をグループから個人に変えて、YouTubeで発表する方式となった。授業コンセプトを「映画」から「動画（YouTube）」へ変えて運用することでコロナ禍の困難な時期にも映像制作の実習授業ができたことは良かったと評価している。

コロナ前2019年度の対面による映画基礎演習は、履修者43名、合格率は93.6%。コロナ禍になった2020年度の遠隔による授業履修者数は54名、合格率は96.3%であった。単純に比較すると、コロナ禍によって履修者は約25%（9名）増、合格率は約3ポイント上昇した。この数値だけを見ると映画基礎演習は遠隔授業になった方が成果を出しているが、一方、修得スキルをみると内容は「映画基礎演習」でなく「YouTuber基礎演習」のようであった。もちろんそれはそれで価値はあると思うが、映像業界で行われているようなグループでの制作の体験は先送りとなり、大学の撮影機材・録

音機材を使って実習する機会もなかった。様々な教育現場で学びの遅れをどう取り戻すかという議論が盛んであったが、本学の映像制作授業においても後期の映像制作の応用科目でどう辻褃を合わせるか担当者と議論した。そこではやはりコロナ禍中の対面授業の中でもいかに安全に映像制作のワークフローを担保できるかが鍵であった。島田ゼミの後期短編映画制作プロジェクトは本学で最も本格的に行う映像制作の実習であるため、コロナ禍において撮影実習をどう安全に行うか、各業界のやり方を参考にしながら、妥当と思える感染防止型の撮影実習ワークフローと制作方法について考えていった。

4. 短編映画制作プロジェクト

4-1 企画開発

本プロジェクトは翌年の第16回札幌国際短編映画祭に応募する15分程度の短編映画を制作するものである。夏休み中に映画の企画案を考えてくるように指示した後、後期授業開始を迎えた。9月下旬は新型コロナウイルスの第2波の収束期にあたり（ピークは2020年8月7日の全国1,605人/日）、後期授業は学年暦通りの日付で対面授業でスタートとなった（図7）。ゼミの企画会議で初期案として16案が集まったが、この段階では決定的なも



図7 2020年第1回企画会議（対面授業）

のがなかったため、企画を絞り、もう少しアイデアを進めて、次回持ち寄ることとした。案の中には「ウイルスのパンデミック」のような直接的な時事ネタはなかったが、一部ソーシャルディスタンスを意識する案や、ネット配信の案も見られた。2回目の企画会議も対面授業で行い、ここから7案に絞り込んだ(表1)。

表1 初期企画案

No	タイトル案	内容	絞りこみ
1	台車男	台車を常に引いている男性と、見ている警官の話	
2	ダメ男更生物話	バチンコ好きなダメ男が赤ん坊と出会い悪の組織に追われる	○
3	逃亡劇もの	最後赤ちゃんが連れ去られる(円満)	
4	特撮もの	和風(仮面ライダーとか特撮)スーツレンジャー	
5	POISUTE	ホイ捨てに対して日頃イライラしてる人がプチギレ爆発する話	
6	愛の話	「愛ってなんだろう」がわからない→発案	
7	身近に棺桶がある話	身近に棺桶。意識を向けられすぎそこにあり死ねる	○
8	マスクマン	人や物を切り取れるマスクマン。その切り取りによって世界が歪んでいくお話。	
9	ヘア(髪)ハウス	シェアハウスみたいに髪を共有できるサービスです	
10	配信者に恋	配信アプリで出会った女の子と出会いその配信者を好きになってしまう。ディスタンス時代のテーマっぽくリモートでのキス、リモートでのももど…	
11	寝て起きたら別人に	主人公が寝て起きたら別人に変わるミステリー	○
12	空を見る	空を見るのが好きな主人公、空を見るためならなんでもする。	○
13	窓越しの彼(恋愛)	窓の外に通りかかる男性がいて、彼のためにチーズケーキを焼く。道路にでようとする男性は殺人鬼で、殺されてしまう	○
14	3か条のノート	夢の中で自分に出会う。その人は未来の自分で、こうならないでほしいという3か条と書かれたノートを託す。(ノートに何が書かれているかは未定)	○
15	学園モノ	女子高校生3人。幼馴染の2人と新しい友だち。新しい友だちはクラスの中心人物で悪いやつ。時が流れ、同窓会。SNS	
16	夢のまた夢	会社員、彼女にふられ、クリスマス。サンタにお願いごとをして起きると家サンタが、サンタは現実がすべて夢になる世界を叶えるが、その世界から抜け出せなくなる。夢の中の夢のループ	○

その後10月に開催されている第15回札幌国際短編映画祭をリサーチし入選作品の傾向分析を行った後、さらに案のブラッシュアップを行っていった。本来なら実際に映画祭会場に足を運び、リアルな体験として参加する予定であったが、2020年は新型コロナウイルス感染拡大の影響で映画祭がオンライン開催となりパソコンで視聴することになった。前年度の先輩の作品が入選していたため、劇場の大スクリーンで視聴することは自分たちの未来像として制作のモチベーションにつながるはずだったが、体験の機会が遠隔となったことは残念であった。

4-2 第3波とプロジェクトの遠隔化

2020年10月28日に北海道は独自で設定する「警戒ステージ」を「1」から「2」へ引き上

げ、まもなく11月7日には「警戒ステージ3」とした。本学でもこれに連動し、11月6日に教職員に対して学内文書にてコロナ対応の通知(第8報)が周知され、警戒ステージが「3」となった場合は授業を「遠隔授業のみ」とする対応が予告された。11月7日から予告通り本学でのすべての授業が遠隔授業となった。島田ゼミにおける短編映画制作プロジェクトはここから遠隔での運営となった。

11月10日の遠隔でのゼミナール初日は、事前に遠隔となる可能性を予告していたこともありスムーズな流れであった。前期授業の途中で遠隔授業から対面授業に戻ったように、感染状況次第でまた対面授業が再開されるだろうと筆者は楽観していたが、実際には第3波は第2波よりも長く大きな影響となった。11月7日の警戒ステージ「3」への引き上げから北海道では集中対策期間が続き、延長を重ねながら最終的に2021年3月7日まで続いた。2021年の1月7日には国から2回目の緊急事態宣言が発出された。北海道はこの対象には入らなかったが、緊急事態宣言は対象地域を増減しながら最終的に3月21日まで続いた。

4-3 Miroの使用

企画の絞り込みでは表1のNo.7「身近に棺桶がある話」が採用されたものの企画開発は難航していた。そこで絞り込みの中で残っていたNo.13「窓越しの彼」を予備案として並行して企画を深めてみることにした。この企画のブレインストーミング(ブレスト)に、当時オンラインホワイトボードとして英語でリリースされていたMiroを使用してすることにした。Miro自体には音声会話機能はないが、Zoomと併用すると対面授業でふせんを使ってブレストしているのに近い使用感があつた(図8)。特に同時に一斉に作業することができ、Zoomにはないホワイトボードの保存機能

があることが使いやすかった。英語の画面でアカウント登録が必要なため最初に少し補助を必要としたが、そこも Zoom で画面共有しながら進めるとゼミ生たちはすぐに使いこなすようになった。この組み合わせは現在島田ゼミの遠隔授業の基本スタイルとなっている。



図8 Miroを使用したアイデアブレスト会議

Miro を使用できるようになってから、遠隔授業での映像制作のプリプロダクションミーティングがやりやすくなった。最終的に皆で共有するようなタイプの提出課題は提出場所を Miro にしておくとい互いに進捗が目に見えるため、間に教員を挟まなくとも学生が主体的に、相互に影響を受けながら更新していくことができる。これが e メールだとこうは行かない。学生だけで開く会議の結果も、Miro 上で司会にファシリテートしてもらいながら進めてもらおうとそのまま議事録にもなる (図9)。



図9 Miroを使用した役割決め会議

3 週の遠隔授業で、チームの役割分担、お

まかなスケジュールの決定、脚本開発、キャスティングと、プリプロダクションは順調に進んでいった。残る問題はコロナ禍の中で実際に撮影ができるのかということであった。撮影時期は2021年の1月末を計画していたが、1月7日には国から2回目の緊急事態宣言が発出された。

4-4 コロナ下での撮影実習に向けて

コロナ禍における撮影に関しては2020年に様々な組織・企業から感染予防対策のガイドラインが発表されている(表2)。

表2 ガイドライン一覧 (PRONEWS より) *日付は2020年

■映画制作 (一般社団法人日本映画製作者連盟)	策定
映画撮影における新型コロナウイルス感染予防対策ガイドライン	5月14日
新型コロナウイルス対策ガイドライン作成のための手引き	5月29日
■撮影所 (日活調布撮影所)	
新型コロナウイルス対策ガイドライン	5月25日
■撮影所 (角川大映スタジオ)	
新型コロナウイルス対策に関して	*
■照明部 (日本映画テレビ照明協会)	
照明部における新型コロナウイルス対策マニュアルver.0607	6月7日
■番組制作 (一般社団法人 日本民間放送連盟)	
番組制作における新型コロナウイルス感染予防対策の留意事項	5月13日
■NHK (日本放送協会)	
新型コロナウイルス感染拡大防止ガイドライン	*
新型コロナウイルス感染を防止するためのドラマ制作マニュアル	5月27日
■衛星放送 (一般社団法人 衛星放送協会)	
新型コロナウイルス感染症対策ガイドライン	6月1日
■ケーブルテレビ (一般社団法人 日本ケーブルテレビ連盟)	
ケーブルテレビ業界向け新型コロナウイルス対策ガイドライン策定	5月14日
■コミュニティ放送局 (一般社団法人 日本コミュニティ放送協会)	
コミュニティ放送事業者の新型コロナウイルス関連ガイドライン	*
■JFC (ジャパンフィルムコミッション)	
ロケ撮影支援における新型コロナウイルス感染予防対策ガイドライン	6月24日
■一般社団法人 日本アド・コンテンツ制作協会	
制作業務再開のための「ガイドライン」について	5月15日

1 回目の緊急事態宣言が解除される2020年5月25日を前に、5月14日付で日本映画製作者連盟(映連)が「映画撮影における新型コロナウイルス感染予防対策ガイドライン」を発表している。5月27日にはNHK広報局が「新型コロナウイルス感染を防止するためのドラマ制作マニュアルについて」を発表した。国内の主なガイドラインはPRONEWS(2020年6月15日)の新型コロナウイルス感染予防ガイドライン一覧にまとめられている。これらは映像業界向けの内容で、たとえばスタジオ管理者はどのように対応すべきかなど商業映像制

作のワークフローの多岐にわたっている。本プロジェクトではまずこの映連のガイドラインを参考に、本学の撮影実習授業に適用される範囲で感染防止対策をまとめた（表3）。

表3 島田ゼミの制作と映連ガイドラインの感染防止対応

映画製作者として講じるべき具体的な対策		
具体的な対策	島田ゼミの制作	適用可能内容
(1)撮影関係者人数の制限	○	必要最小限に限定 2メートルの社会的距離を確保 ワークフローの最適化
(2)撮影シーンの制限	○	設定を極力変更 必要最小限のスタッフのみ
(3)スタジオ及びセットでの衛生の促進	○	アルコール手指消毒剤
(4)撮影関係者に関する感染防止策	○	マスク着用や手洗い、検温 有症状者の参加不可
(5)食事とケータリング	○	ケータリング形式NG 食事の分散
(6)キャストイング	○	WEBオーディション
(7)ヘアメイクと衣裳	○	手洗いや手指消毒、再利用しない
(8)美術と大道具	○	用具を共有しない
(9)ポストプロダクション	○	社会的距離
(10)撮影中に感染か疑われる者が発生した場合の対応策	○	速やかに隔離、最低48時間の経過期
(11)周知・広報	○	感染予防を関係者へ周知
(12)保健所との関係	○	保健所の聞き取りに協力

2021年1月7日に2回目の緊急事態宣言が発出され、東京、神奈川、埼玉、千葉の1都3県、その後1月14日に7府県が追加され、栃木、岐阜、愛知、京都、大阪、兵庫、福岡の11都府県が対象となった。北海道は含まれなかったが、引き続き集中対策期間が継続されていた。本学での後期授業は2020年12月22日の学内文書により1月5日から1月29日まで原則すべての科目で遠隔授業とすることがすでに決定していた。対面授業はどうしても必要な科目のみの許可制とされ、文書の中では長引く遠隔授業や自粛生活による学生のモチベーション低下や心の問題に言及があった（図10）。

本プロジェクトは2020年9月から始動しており準備期間としてすでに約3ヶ月が経過していた。脚本もようやく完成し、俳優も決まりいざ撮影という段階で、プロジェクトとしてどのように判断するかの岐路に立たされていた。大学として決定した方針はもちろん、プロジェクトの指導教員としてトップダウンで中

「本学では年明けの1月5日(火)から1月29日(金)までの授業と定期試験についても、引き続き原則全ての科目において「遠隔授業」とします。なお、遠隔では実施不可能であり、対面を実施する必要があると判断される科目については、十分な感染防止対策を施した上で、対面での実施を許可することとし、その許可は教務委員長と学長が行うこととします」（原文ママ）

（中略）

「今回の決定においては、学内感染のリスク軽減を優先したものとなっていますが、そこで最も懸念されるのが、学生の授業へのモチベーション低下や心の問題です。学生は11月からキャンパスに登校できず、そのまま春休みに突入することになります。」

図10 2020年度の本学の対応について（第12報）

止を決定することもできるが、これもまたコロナ禍という特殊な状況における学習の一環となるであろうと考え、まずはプロジェクトの方針としてどう判断するか学生たちの意見を聞くべくプロジェクトの会議にかけてみた。

なお、この時点（2020年12月末）での社会背景として、我が国の新型コロナウイルスの感染状況は2020年1月ころから第1波、第2波、第3波と続き最初の感染爆発から約1年が経過しようとしていた。TV業界、映画業界はそのインパクトを受け多くの企業・団体で一旦制作を見合わせる事となったが、前述した通り5月には映像制作における感染防止マニュアルが様々な団体から策定され、試行錯誤はありつつも徐々に制作が再開されていった。2020年4月27日にはNHKがテレワークドラマ「今だから、新作ドラマ作ってみました」の制作を発表、Web会議システムを利用して全編リモート撮影を行った新作ドラマを5月に放送した。映画界では行定勲監督、上田慎一郎監督、俳優の斎藤工らがリモート制作の映画プロジェクトを立ち上げた。このような接触な

しに撮影する「ゼロリスク型」のリモート制作も事例として現れながら、感染防止ガイドラインに沿って従来どおり「リアルに撮影」する「リスクマネジメント型」の制作も普及し、12月の時点では新作のドラマ収録や映画撮影も、感染防止対策をとった上で再開されていた。

4-5 プロジェクトの方向性の判断

コロナ禍の中、本プロジェクトのとるべき方向性について、学生たちと会議を行った。会議はZoomで行い、議題は事前にLINEで共有し意見を求めた。議題の要点は以下の通りである(図11)。

選択肢：

- 1) 制作をやめる
- 2) 大学に安全と理解される撮影方法(たとえば少人数, 集まらないやり方)に変形させて申請
(→撮影は大変, もちろん作品のクオリティにも影響あり)
- 3) 遠隔の制作に変える(遠隔なら許可は必要ないが, ただし作品の雰囲気は大きく変わる, ズームで撮影+ロトスコープ?)
- 4) ダメ元で今の規模のまま申請する
(→注, 落ちる可能性大)

図11 プロジェクト会議の議題(原文ママ)

プロジェクト参加学生は9名全員が回答。以下に主なものを紹介する(図12~17)。最初に回答してくれた学生Aは、冒頭に「何思われてもいいんで」と前置きのある通り、コロナ禍の中で進行するプロジェクトに対して「中止する意見」を言ってよいのか葛藤があったと思われる。日々報道される新型コロナウイルスの感染拡大のニュースなどから恐怖を感じながら生活していることも推察され、対面の撮影実習に戸惑いがあることが確認できる。学生Aは「制作をやめる」または「遠隔の制作に変える」のどちらかという意見であった。また、遠隔の制作方法によって作品の表現が

変わることも「違った映像ができて面白い」とポジティブに捉えている。

何思われてもいいんで、思ってること言わせていただきます。

私の意見としては、

- ・制作をやめる
- ・遠隔の制作に変える

このどっちかなと思います。

企画の意見出しの時点で、3密にならないようにしようとして話を進めてきました。ですが、3年だけでも9人いますし、そこにお手伝いしていただける4年生、キャスト3人+(エキストラ2人)、先生、と、人数が多くなってしまいます。いくら消毒する。マスクする。徹底しても、講義のときよりも確実に人との距離は近くなるので、密は避けられないと思います。それに、キャストさんに関しては演じる時だけマスクを取るという形になると思います。そうすると、対策を徹底しても…とってしまいます。正直、怖い、気を付けなきゃ、と言っている人が多いにも関わらず、やるうとする事は「密集」になってしまうことをしようとしているのではと思います。「え…この状況なのにやるの??」とって思ってしまった時も多くありました。今まで、みんなでここまで頑張ってきたので、もったいない気はします。ですが、密の状態になり危ない状態を自分達から作るよりも、みんなの安全性を優先すべきだと思います。

方向性が変わり、大変な準備ができてても、それでも頑張ろうとなるのであれば、遠隔制作で進めていくのもいいのかなと思います。なにも、集まって撮って編集して出来る物がだけが映像ではないと思います。遠隔という形でも、違った映像ができて面白いと思います。

長々と失礼しました。

図12 学生Aの回答(LINE)

続いて学生Bの回答は、「少人数での対面実習」、または許可が降りない場合は「遠隔での実施」という意見であった。少人数撮影に際しては参加できる学生と参加できない学生が出るため、シフト制を提案している。「いけるところまで粘りたい」というプロジェクト完遂をあきらめない姿勢も確認できる。

私は

①「出来るだけ少人数での制作」

大変だけど、グリーンバック使って、撮影・監督・先生の3人とキャストを合わせた4人での撮影とし、撮影担当はシフト制で入れ替わる形。みんな、「撮影、ちゃんとした!」って感じはでると思う。

②「遠隔での実施」

対面がやっぱり厳しい状況ではあるので、許可が下りなかったら遠隔/バターンも視野に入りたい。

のどちらかで、いけるとこまで粘りたいかなと思っています。

図13 学生Bの回答(LINE)

学生Cは「制作をやめる」または「遠隔に変える」という意見であった。「撮影したからコロナに感染するというわけではないが、感染する確率を減らした方がよい」と述べている。また、時間をかけてやってきたことが突然中止となることによる「モチベーションの低

下」について言及されている。やめないで何かしらの形で制作したいという意見であった。

と同意見で

- ・制作をやめる
- ・遠隔に変えるのが良いと思います。

正直今後の事も考えると対面でやるのは厳しいかになって気持ちです。コロナにかかるかからないはず以外でも起きうる事なので、撮影したからかかるってわけでもないと思いますが、少しでもその確率を減らすのは大事だと思います。

ここまで進めてきたことが今の段階で形にならないのは残念な気がしますが、もし2)の家で学校がおkしてくれたところで当日「やっぱり駄目です」って状況になるかもしれないことを考えるとモチベ的なところでも心配です。そこまでのみんなの頑張ってきたこと、時間、金銭面などのマイナス面がMAX状態で、そこから「何か制作したいからやっぱり遠隔にしよう」って形になったとしても難しい気がします。

なので今のままで行くという流れをこの段階でとめて、今まで考えてきた使えるところは使った遠隔での撮影はどうかになって気持ちです。

今は制作をすることにに対して前向きなので制作をやめることはこの次くらいで考えています。

図14 学生Cの回答(LINE)(黒塗りは筆者)

学生Dは、「遠隔でできるところを遠隔撮影とし、残る部分を少人数で撮影する」という意見である。見せ方を変更し、人をあまり使わずに表現できるシーンを多くしていくのはどうかという意見であった。

私は遠隔でできそうなところは遠隔で撮影して、それ以外のところは少人数で注意して撮影をして進めるか、制作を中止した方が良いのではないかと思います。

- ・遠隔+少人数撮影について

脚本を見ていても、シーン3の友人、幸大、雫が話すところやシーン8の雫が春菜に謝るところはLINEでも出来そうですし、シーン7の幸大が友人と一緒に春菜や雫をバカにするところは、幸大がtwitterで春菜をバカにする投稿をするだけでも表現できそうなので、そのように映像の表現の仕方を変えてなるべく人を多く使わないやり方をすればいいのではないかと考えています。

自分自身も絵コンテ、番組表の作成や撮影スケジュールの管理をする都合上、なるべく撮影時間は減らして編集で出来るところは編集でやりたいので、人をあまり使わず表現できるシーンを多くしたいです。

- ・制作の中止について

上記の内容が難しいようであれば、監督やロケハン部など、それぞれの役職が今までやってきたことを無駄にすることにはなりますが、中止にした方が良いのではないかと思います。

図15 学生Dの回答(LINE)

学生Eは「少人数の撮影に変更」または「遠隔での撮影」という意見である。「せっかくみんながやる気を出しているのにやめたくない」、「こういう時代に僕らは実写映像を作ったということを残したい」といった、プロジェクトをあきらめない姿勢も確認できる。ただし、感染拡大の状況で「対面でやるのが良い考えかどうかは分からないし、色んな考え方があってよい」とも述べている。

先生にも直接伝えましたが、僕の意見としては

- 2 少人数で申請する撮影

or

- 3 遠隔での撮影

でやりたいです。

僕は出来れば4の今まで通りの方法での撮影が1番やりたいと思っていますが、難しい状況にあり、今までの撮影を行えるような方法としては、2が今のところ近いと思っています。それでも難しければ、3かなと今は思っています。

せっかくみんながやる気を出して、動き出している中で、僕は制作をやめるをせずにプロジェクトにしっかり向き合っていきたいと思っています。

向き合った結果やめざるおえない時はその時なので、それまでは僕らができる事をやりたいです。

コロナウイルスの感染などをふまえると、対面でやる考え方がいかどうかは正直わかりませんが、色んな考え方があっていいと思います。

僕自身、それでも対面でやりたいと思っている理由は、もぐだけもがいて、それでもこういう時代に僕らは今まで通り実写映像を作ったぞ！って事を残したいからです。

図16 学生Eの回答(LINE)

学生Fの意見は「(感染対策した上で、人数制限なしで)撮影したい」または「少人数の撮影に変更」というものである。アルバイトなど学校外で対面の接客がありマスクやフェイスシールドを使って行われていることや、PCR検査の適用についても提案されている。少人数撮影となった場合には、クロマキー撮影などを取り入れながら、できれば脚本の変更なしで撮影したいという意見であった。残り3名は「遠隔での撮影」または「少人数で撮影」、「人数を減らしても完成させたい」であった。

僕の意見としては

- 2か4です。

主に4推し、普通に撮影したいと言う結論です。

安全確保第一ですがそもそもコロナにかかって無ければ4のまま普通に撮影できるのでは無いかなと思います。僕自信、アルバイトで客とかなり近い状況で接客するのが多いためそんなにビクビクしながら撮影するのは納得いきません。撮影陣がフェイスシールドとマスクをすれば大丈夫ではないかと考えてます。他にも撮影陣のPCR検査などをして感染してるか否かの安全確認を行ったりが出来ると思っています。PCR検査も即日で行えるものが出来たとニュースで聞きました(違ったらすみません)。なので普通に撮影出来るんじゃないかなと思います。

2の場合でも少なくとも5、6人、多くて9人くらい(キャスト含めず)ですかね？手洗い、消毒、検温。だいたいこれらを徹底していれば普通に撮影出来ると思うんですけどね👉でもこれら2つが無理だったとしてもグリーンバックで撮影したりは出来ると思います。なので撮影に賛成です。

長々と失礼しました。

図17 学生Fの回答(LINE)

4-6 許可申請と感染防止対策

前述の通り本学ではこの時期、原則としてすべての科目が遠隔授業となっており、「授業の特性上どうしても対面授業が必要な科目」については「対面授業許可申請」を本学に提出できることになっていた。事前に教務課への

ヒアリングを行ったところ、この時期、許可申請は 30 件ほど提出されていたが、許可されたものは 1, 2 件で、学生の参加が 1 名のみと感染リスクが極めて低いものだけが許可されていた。仮に本プロジェクトで 9 名の参加で申請した場合、許可が降りないことは容易に想像でき、映連のガイドラインを見ても 10 人を超える規模で許可される合理性は見つからなかった。また当時、新型コロナウイルス感染症対策分科会から、感染リスクが高まる場面の例として「5 人以上の飲食」が例示されていた（新型コロナウイルス感染症対策分科会 2020 年 10 月 23 日）。TV ニュース等で 5 人以上の会食での感染事例が報道される中、撮影実習に参加すると書ける妥当な人数は最大でも 5 名であろうと筆者は考えた。対面授業許可申請には申請書のほか資料として映連および NHK の感染予防対策ガイドライン、そして島田ゼミで考えた感染防止型の撮影実習の撮影図（図 18）を添付して提出した。

島田ゼミ撮影における感染防止対策について 資料 1

2月に実施希望の、撮影実習（希望者のみの参加）について、
資料 2「映画撮影における新型コロナウイルス感染予防対策ガイドライン（一般社団法人日本映画製作者連盟）」に基づき、下記の通り、感染症対策を行います。

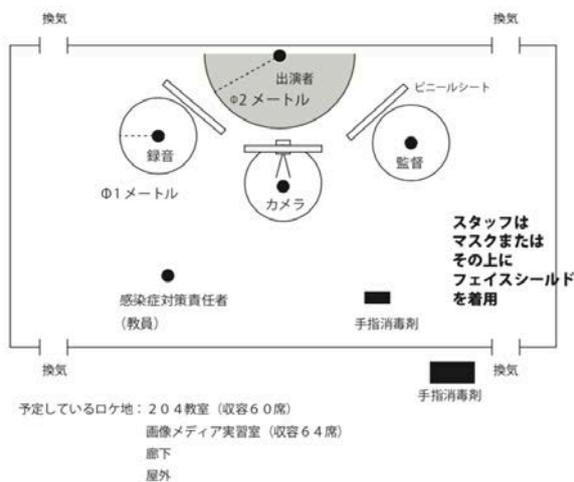


図 18 島田ゼミ短編映画制作の感染防止対策図

4-7 申請結果と学生の反応

申請の結果、本学から条件付きでの対面授業の許可が得られた。その条件とは、感染防止対策をとった上で「お昼を挟まないように実施すること（午前のみまたは、午後のみ）」、また、これにより不足する時間が発生する部分については、日程を追加することも併せて許可された。参考までこの許可連絡の前日 2021 年 1 月 24 日を見ると、全国の新規感染者数は国内 3,988 人/日（全道 94 人/日）で、第 3 波のピーク値である国内 8,045 人/日（全道 181 人/日）(2021 年 1 月 8 日)から半減している。1 週間の指標で見ると、前週の数值（10 万人あたりの新規感染者数 21.07 人/週）は（16.35 人/週）へ下がっている（厚生労働省オープンデータ 2022, 筆者計算）。今計算してわかることであるが、撮影日は 2 月の第 3 週であったため、本プロジェクトの期間はちょうど第 3 波の下降線、収束期にあったことがわかる。この対面授業申請の結果を学生たちに伝えた。また、条件付きで対面授業（撮影実習）の許可は得られたが、「もし遠隔でやりたければ、遠隔での撮影を考えることもできます」と筆者の意見を添え、学生たちの意見を聞くことにした。会議は Zoom で行われた（図 19）。

3年生で今後の撮影について意見をくれた人の中で、どうしても遠隔で撮影したいという人がいれば別途遠隔で撮影も考える。
そもそもみんなは制作をやりたいか？

学生B：もちろんやりたい

学生D：出来るならやりたい

学生F：進める前提

学生C：このままやっていきたい

学生G：せっかく申請をしたり皆も頑張っているのでもこのままやっていきたいが、とにかく感染拡大に注意するべきだと思う。

学生H：申請も通ったことなのでせっかくだからこのまま進めたい。

学生A：中止か遠隔って話したけど、学校で申請通ったなら制作で大丈夫なのかなとは思っています。さっきの通った申請見たときも出来そうって思った。

学生E：皆と同じくこのまま制作を進めたい

図 19 2021 年 1 月 26 日の会議議事録

特に心配されたのは撮影実習の実施を心配していた学生 A であったが、申請が通ったことや、条件の妥当性、撮影図を見て、皆撮影ができ

そんなイメージが浮かんだようであった。

4-8 撮影の最適化・ワークフローの模索

少人数撮影とするためまずスタッフの配置を検討した。撮影図によると学生の配置は監督・撮影・録音で3名、俳優1名、そして現場責任者として筆者の5名である。この配置で不足する照明、制作作業は各自が兼務とした。そして遠隔スタッフは美術3名、助監督で1名、スクリプターで1名、プロデューサーで1名とした。遠隔と言っても現実的には人数制限もあって撮影現場をライブ中継するようなことは難しく、進行予定に応じて裏で準備したり、離れた教室にひとりで待機するスタッフを時差で呼んで片付けをしてもらうといった内容にとどめた。またある程度技術職の専門化が進んでいたため、担当部署をローテーションすると経験値のあるなしで撮影効率が下がるため、基本的にローテーションは行わないこととした。反面、遠隔スタッフの感染リスクは低減できるため、人によって歓迎される部分もあった。本作ではメインキャストが3名いたが、人物が同居するシーンの撮影は別々に行い、後に合成する方法とした(図20)。

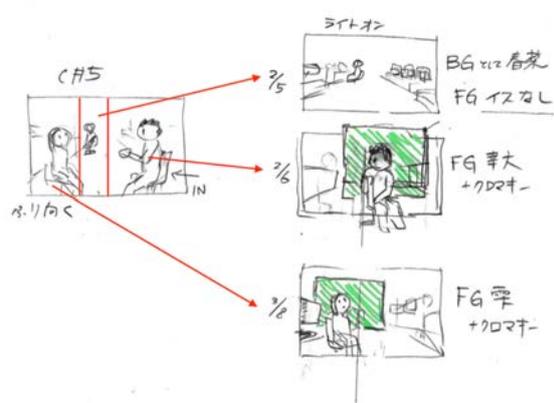


図20 3ショットの3分割撮影プラン

たとえば3ショット(3人が同一画面にいる)の映像を作るには別々の日に撮影した3人を編集でタイミングを合わせて1枚の映像を作る。そのためにはカメラの位置や高さ、使

用レンズや露出などを再現する必要があり、撮影時に様々な記録を取った。1つの映像のために手間が人数分かかり、結果撮影日数が増える原因となった。



図21 合成後の3ショット

撮影は食事が発生しない午後のみに限定したため、当初4日で計画していた撮影は倍に膨らんだが、シーンの半数を占めていた後半のモニタージュシーンの撮影を(了承を得て)学生が参加しないことにし、指導教員である筆者が撮影し全体の日数と予算の圧縮を図った。香盤表的には、午前中に教員が1人で撮影し、午後から学生が撮影するというスタイルで全6日間の撮影日程とした。これに除雪やクロマキーの設定など撮影以外の事前仕込み、背景撮影の日程を入れると全部で12日間のスケジュールとなった。



図22 撮影用のクロマキーセット

撮影日数が増えたため、役者のスケジュールに追加調整が必要となり、都合のつく日程を求めると撮影は先へ先へと伸びていった。

撮影・録音・監督の主要スタッフが揃わない日も発生し、日によって助監督が監督を務めるなど、結果として多少役割を入れ替えながら撮影した。撮影は、2021年2月5日にクランクインし3月6日にクランクアップした。



図 23 撮影風景

4-9 作品の仕上げ

撮影が約1ヶ月間と長期に渡ったため、編集は撮り終わったパートから随時スタートしていった。カメラはBlack Magic Design Pocket Cinema Camera 4K (BMPCC4K) を使用し、撮影サイズは4K UHD (3840x2160 ピクセル) でBlackmagic RAW 収録、完成フォーマットはフルHD (1920x1080 ピクセル) で、アスペクト比は16:9, 23.976 FPS であった。データの軽いフルHD でオフライン編集を進め、後に高解像度ファイルに差し替えて仕上げる計画で始めた。本プロジェクトは当初クロマキー合成がここまで複雑に入る予定ではなく、教員も合成技術やAfter Effectsなどのソフトの使い方をゼミで教えてこなかったため、学生にとってはほぼ手探りでのスタートとなった。また本学のメディア・クリエイティブ・センター(MCC) を使用し複数の編集者で進める計画を立てていたが、新型コロナウイルスの影響でMCC が閉鎖されてしまった。館長に相談し、感染対策を徹底し教員が立ち会うことで特別に、少人数での使用が認められた。編集は孤独な

作業となり、一部の学生に作業が大きく偏ることとなった。編集者は朝早くから夜遅くまで1人でMCCに詰めることになり、プロジェクトの長期化とストレスで学生にも疲労が見えてきていた。3月半ばになると同じプロジェクトをやっているはずの学生が就職活動を始めるとメンバーのモチベーションと集中力にも影響が出てきていた。MA (整音) は学外の音楽スタジオでオフライン用データを使用して仕上げを行った。音が完成したことで、映画のフルHD版は完成できたが、MA後に高解像度版の編集を始めることはできなかった。これは学生の問題というよりも、指導教員である筆者の判断が大きい。コロナの中でプロジェクトが長期化し、年度と学年も変わってしまった。就職活動も始まりこれ以上一部の学生だけを鼓舞して引っ張ることは難しいと判断した。何よりここまで学生が頑張ったことで、もう十分に短編映画制作のプロジェクト学習の目標を達成したと評価できた。コロナ禍の中、作品を完成させ、あきらめず精一杯頑張った学生たちには拍手を贈りたい。

これまで短編映画制作のプロジェクトに指導教員として9年取り組んでいるが、ポストプロダクションのワークフローを途中で断念するのは初めてのことであった。今考えれば、コロナ禍で撮影方法に影響があるならば、当然ポストプロダクションのコストにも影響が出るはずであった。個人的には編集ワークフローについては大きな課題が残った。

4-10 映画祭への参加

完成した作品は映画祭やコンテスト等に応募し、発表の機会を得ることができた。前年に続き2021年も国内外の映画祭の中止や延期、オンライン化があった。本作は最終的に北海道映像コンテスト2021で奨励賞を受賞、また目標としていた第16回札幌国際短編映画祭で無事に入選することができた(図24, 25)。



図 24 第 16 回札幌国際短編映画祭 上映前舞台挨拶



図 25 札幌国際短編映画祭での記念写真

4-11 作品情報

完成作品の情報は以下の通りである(表 4)。

表 4 作品情報

作品名	バズれ！大根おろし
長さ	16 分 50 秒
フォーマット	1920x1080 23.976 カラー
ジャンル	コメディ ドラマ
完成年	2021 年
あらすじ	いつでもどこでも大根をおろしている女子大学生の春菜は、周りから奇異の目で見られている。ある日、春菜は男子学生のいじめのターゲットとなり同級生の乗に絡まれるが、真相を知った二人は個性を武器に世界と戦い始める。
主演	高田まどか、丸山琴瀬、吉本琢哉
作品リンク	https://youtu.be/X8ff2nT6wR4

5. 感染防止型ワークフローの考察

コロナ禍における対面での映像制作においては、基本的には業界の感染防止ガイドラインに従って行うことで、ある程度安全に実行可能であると思われる。しかし、商業映像制作と異なり学校教育機関には特有な問題や、学生が参加するプロジェクトの傾向もあると思われる。本章では本プロジェクトを遂行した過程を振り返り、コロナ禍あるいは同様の状況下において今後適用可能な感染防止型の撮影実習ワークフローについて考察する。

5-1 オンラインツールの常時使用

本プロジェクトでは企画開発段階から全学的な遠隔授業となったためオンラインツールの使用が当たり前のように行われてきたが、これらは感染防止の観点だけでなくアフターコロナの世界でも有用であると考えられる。特に本プロジェクトでは、基本連絡に LINE、当日のリモート会議に Zoom、ブレストに Miro、議事録に Google Document を使用してきた。本稿執筆時の 2022 年 6 月現在では、これらに加えて Discord もしくは Slack を採用している。Discord は元々ゲーマー向けチャットサービスとして普及してきたようであるが、ボイスとテキストの両方でコミュニケーションができ、特にボイスチャットが高音質である。Discord 内にチャンネルを複数作ることができるため、プリプロダクション時の各項目（たとえば、キャスティング、ロケハン、美術制作、脚本進捗）といった内容を項目別に共有・アーカイブできる。スマホアプリもあるのでスタッフ間で使い慣れていければ、過去の議題をピンポイントで振り返ることもできる。LINE や Facebook メッセンジャーではこれが困難で、1 つの長いスレッドの中で「あの話どこにあったっけ？」と探すようなことが起こりやすい。本プロジェクトでも日々の連絡に LINE を使

用していたが、タイムラインが長くなり、結局プロデューサー用の LINE グループや脚本チーム用の LINE グループなどができていた。Discord や Slack の機能を使用すればプロジェクト管理はよりスマートに行うことができる。島田ゼミでは 2021 年以降のプロジェクトでは Discord を採用してプロジェクト運営を行っている。映像制作など報告が多岐にわたるプロジェクトであるほどこれらのアプリは利便性が高いと感じている。もう 1 つ重要な TIPS であるが、島田ゼミでは学生どうしでオンライン会議を進める場合には音声で行うことを推奨している。オンラインでのやりとりでは LINE や Facebook messenger の画面に文字を打って反応を待つことで何時間も経過してしまったり、誤入力や言葉のニュアンスをめぐって人間関係が悪化してしまうことが多々あり、こうしたことを避けるためにも、遠隔の環境では Zoom や Discord, LINE のグループ通話など、テキストチャットでなく音声チャットでのコミュニケーションを薦めている。

5-2 演出手法の工夫

本プロジェクトではコロナ禍のため対面撮影は少人数で行うこととなったが、スタッフが少人数であるために、一日に撮れる量が限られ、結果として撮影日数が増加した。こうした中で出てきたアイデアが、人物を登場させなくてもできる表現方法である。たとえば実写映画であっても、SNS のやりとりで物語を進めたり、部分的にアニメーションにしたり、紙芝居（スライド）を使うなど、人物以外で表現できるシーンがあれば、対面での撮影量を相対的に減らすことができる。本プロジェクトの場合は特にモンタージュ（時間経過）シーンがそれに該当した。結果的には今回はモンタージュシーンは実写撮影したが、表現としては 1 枚絵のイラスト＋ナレーションのような省略方法も検討していた。作品に合うよう

であれば、そのような思い切った演出手法を取り入れることも有効であろう。

5-3 「部屋」のシーンの危険性

映画のようなストーリーものの場合、脚本上、登場人物の家（部屋）が描かれることが多い。本プロジェクトではこの「部屋」での撮影がもっとも感染リスクが高いだろうと考え、これらのシーンはすべてクロマキー合成で撮影を行うことにした。ロケ地にもよるが、「部屋」を実在する部屋で撮影する場合、6～10 畳くらいまでのワンルームあるいは隣り合った 2 ルーム等が候補で上がってくることもあると思うが、その空間では安全性を保てる社会的距離の確保が難しいのではないかと考える。窓を開放することで換気は行えるものの、実際の撮影では録音のため窓を閉めることも頻繁に行われ、夏は気温の上昇、冬は暖房の必要性から、マスクの装着が緩んだり、部屋を密閉するなど 3 密回避が難しくなりやすい。スタッフのワクチン接種や事前の PCR 検査、健康・検温調査など安心できる要素が増えてくるとまた違うとは思いますが、撮影実習を安全に行おうとする管理責任者の目線から言えば、「部屋」のシーンは感染リスクが上がりやすい要注意のシーンであると筆者は考える。特にセリフがある場合、俳優の感染リスクも含めた同意書や保健・保険体制がとれる商業映画とは異なり、開講期間のある教育機関では隔離期間を経ても必ずしも撮影を再開できるとは限らない。

本プロジェクトでは、カメラも含めてスタッフは役者から 1.5～2m の距離を取り、ビニールシートやフェイスシールドも使用する撮影図を添付することで大学から許可を得ることができた。主人公の「部屋」で 2 人が向き合って話すシーン（マスクなし）は、広い教室にクロマキーのセットを立て別々に撮影した映像を編集で組み合わせて一つの画面にしてい

る。もしこのような合成が最初から想定されるのであれば、事前の授業でクロマキー撮影についてレクチャーしたりテストしておくことで、撮影効率や編集の効率を高めることができるであろう。

5-4 食事を挟まない撮影

2022年の現在では「黙食」の文化や、ワクチン接種が進んだことで2021年2月とは状況が異なると思うが、食事などマスクを外す局面で感染リスクが増大することは間違いないであろう。本プロジェクトでは対面撮影において食事を挟まない香盤で運営することで、感染リスクを低減させることができたと考えている。撮影実習の場合は半日の撮影とすることで日数がかかってしまうこともあると思うが、たとえば午前と午後で撮影隊を分け、午前のチームは昼食前に解散、昼食をすでに取った別のチームが午後から集合して撮影を行うといった応用も可能かもしれない。午前と午後でキャストの出番を変えるなど、組み合わせによってはリスクを低減させつつ撮影日数を圧縮できるかもしれない。また本プロジェクトでは、学生が参加しない午前の時間帯にヘアメイクを行ったり、美術仕込みを本体撮影時間と明確に区切るなど、撮影現場で人数が増えないように当日のワークフローの分散も行っている。この点は映連のガイドラインも非常に参考になる。

5-5 ショットの分解と合成

本プロジェクトでは、主にキャストが複数同居するシーン（2ショットや3ショットと呼ばれる）について意識的に分解を行った。この過程は感染防止対策として取り入れたものであったが「別々に撮影された複数素材をいかに違和感なく一つの画面に統合するか」というテーマ学習のような側面をプロジェクトにもたらした。そこで得られたノウハウを共

有する。基本的には画面を構成する要素の間で日替わりがあるため、分解があるカットではカメラポジションと高さ、レンズのミリ数について記録を取った（図26）。



図26 撮影の記録写真



図27 撮影時のレファランスと完成画面

そして先に撮影した要素の写真を次の撮影時にレファランスとして引用し、位置の確認

や光の条件などを可能な限り合わせた(図 27)。クロマキーの合成では色の反射が編集時に問題となることが多い。図 27 の例ではパソコンのモニターに緑色が反射して映り込んでいる。クロマキーを背景として撮影する場合であっても、クロマキーのあり/なしの両方を撮影しておくことと編集の時に助けとなることが分かった。会話のタイミングがあるシーンでは、最初の撮影時にセリフのテンポをスマートフォンで録画しておき、撮影前に録画に合わせてリハーサルした(図 28)。どのカットで合成が行われるか、事前に撮影計画を絵コンテなどで立てておくことと管理がしやすかった(図 29)。



図 28 ビデオでの演技のタイミング確認



図 29 撮影管理用の絵コンテ

6. まとめ

本稿は、2020年9月～2021年3月まで、新型コロナウイルスのパンデミック状況下で行った本学の短編映画制作プロジェクト『バズれ！大根おろし』の事例について、制作の各過

程で行われた具体的な感染防止対策と制作上の工夫を紹介しながら、今後適用できる感染防止型映像制作のワークフローについて考察した。以下に補足として、本プロジェクト時点では採用できなかったが、現在では採用できる3点の感染対策を加えておきたい。

6-1 現在採用できる感染予防対策

①ワクチン

本稿執筆時の現在(2022年6月)では我が国において新型コロナウイルスの4回目のワクチン接種が始まっているが、本プロジェクトの撮影が行われた2020年2-3月の時点では医療従事者向けに提供が開始されたばかりで一般向けのワクチン接種は始まっていなかった。またワクチンの接種は個人の判断であるため義務付けることができず、接種したかどうかについては個別に確認するなど情報の取り扱いに注意が必要であると筆者は考えている。特に学校機関等で集団に向けてワクチンについて発言する際は、接種の強制と受け取られたり接種の有無が差別などにつながらないように気をつけるべきであろう。

②PCR検査

PCR検査については、本プロジェクトでは採用しなかった。本プロジェクトの実行時点においては、PCR検査は、①検査費用、②結果が出るまでに必要な時間、③結果の信頼性、④検査場の混雑、といった理由で実行が現実的ではなかった。しかし今では環境が整い、多くの商業用映画、映像制作の現場でPCR検査が採用されている。

③抗原抗体検査

抗原抗体検査キット等も市販されるようになり、専門医による検査ではないものの、プロジェクト参加者の安全性確保の参考情報として十分採用できる状態になっている。

6-2 感染防止型ワークフロー

本プロジェクトではコロナ禍において試行錯誤しながらも、無事に感染者を出すことなく撮影実習を終えることができた。この事例を振り返り、筆者が現在考える、感染防止型映像制作の撮影実習ワークフローおよびチェック項目を表5にまとめる。

本プロジェクトでは映連のガイドラインをもとに、パンデミック状況下で短編映画の撮影実習を行った。表5の色付きの内容が今回独自で行った感染予防対策部分である。

緑色の遠隔授業から対面授業への移行期には心理面へのケアとモチベーションの向上(M01)が撮影実習に向けて重要であった。

赤色のプリプロダクション期にはオンラインツールの援用(PR01)によって非常に運営を助けられた。演技リハーサルや実際に会って得られる信頼感など、本質的に対面で行われるべき部分は人数制限と時間の問題で思うようにできなかったが、対面撮影でのノウハウがこの部分に生きてくれば今後感染拡大の状況があったときにも工夫ができると考える。

青色のプロダクションの部分はほぼ映連のガイドラインに沿って行った。教育機関での撮影実習では参加者がアマチュアの場合も多いため、参加者の不安解消といったメンタルケア(PR08)も重要となってくる。また、アクリルボードなど学内における感染防止ツールなども可能な限り使用させていただき、学内の保険センター等に専門的なアドバイスを求めること(PR092)も重要である。また地味なことであるが、学内への撮影行為の周知(PR093)も重要な項目である。これは本プロジェクトで実際に起ったことであるが、感染拡大期に大学の危機管理レベルが上がり学内に人がほとんどいない状況で、学生が監督者(筆者)のいない所で自発的に実習室のロケハンを行ってしまった。この集団が教職員に目撃され、学生が感染リスクのある危険な活

動を行っていると見なされてしまった。チームが主体的であればあるほど、ロケハンなど自発的な(勝手な)行動が起こりやすい。

表5 感染防止型撮影実習ワークフローとチェック項目

感染防止型の撮影実習ワークフローとチェック項目 (本学の危機管理レベル2-3相当)						
stage	ID	具体的な準備、対策	No	内容	映連GL	本プロジェクト
遠隔授業 ～ 対面授業 移行期	M01	対面授業へのモチベーションアップ	M011	機材講習		○
	M02	感情の共有	M012	レクリエーション、アイスブレイク		○
	M03	ドロップアウト防止	M021	対話、問いかけ		○
撮影実習前 ～ プリプロダクション (撮影準備)	PR01	オンラインツールの習得	M031	授業動画の録画、アーカイブ		○
			M032	資料のアーカイブ		○
			PR011	オンライン会議 Zoom、Microsoft Teams		○
			PR012	アイデア出し Miro		○
			PR013	議事録 Google Document		○
	PR014	進捗管理、報連相 Discord、Slack		○		
	PR015	音声コミュニケーションでの会議の推奨		○		
	PR02	クロマキー撮影の事前学習	PR021	クロマキー撮影の方法		○
			PR022	クロマキー編集(合成)の方法 After Effects、DaVinci Resolve		○
	PR03	映像演出の工夫	PR031	人なしでできる演出にできないか		○
			PR032	リモート撮影の可否		○
			PR033	屋外シーンへの変更		○
PR034			ショットの分解		○	
PR04	リスク視点でのロケハン	PR041	「部屋」など小空間に注意 →撮影方法で工夫も		○	
		PR042	ロケ地での社会的距離の確保の可否		○	
PR043	誤解を招く行動の自粛		○			
PR05	キャストイング	PR051	WEBオーディション		○	
PR06	編集環境の確認	PR061	RAW撮影素材の編集の可否		○	
PR07	プロジェクトスケジュールの見直し	PR071	撮影スケジュールの倍化 →撮影の可否		○	
		PR072	編集スケジュールの倍化 →納品日延期の可否		○	
PR08	メンタルケア	PR081	感染状況下による関係者の参加同意		○	
		PR082	問いかけ		○	
PR09	相談、許可申請、周知	PR091	管理部門との相談		○	
		PR092	学内保険センター等との相談		○	
		PR093	学内への撮影行為の周知		○	
PR10	ワクチン接種の確認	PR101	個人情報に準じる取り扱い注意		○	
PR11	PCR検査	PR111	料金、所要時間、検査場所の確認		○	
PR12	抗原抗体検査	PR121	料金、所要時間、検査方法の確認		○	
プロダクション (撮影当日)	S01	撮影関係者人数の制限	S011	必要最小限に限定		○
			S012	2メートルの社会的距離を確保		○
	S02	撮影シーンの制限	S013	ワークフローの最適化		○
			S021	設定を極力変更		○
			S022	必要最小限のスタッフのみ		○
	S03	スタジオ及びセットでの衛生の促進	S031	アルコール手指消毒剤		○
			S032	定期的または常時の換気の確保		○
			S033	ビニールシート、アクリルボード等		○
	S04	撮影関係者に関する感染防止策	S041	マスク着用や手洗い、検温		○
			S042	健康状態の確認		○
S043	有症状者の参加不可		○			
S05	食事とケータリング	S051	ケータリング形式NG		○	
		S052	食事を分散		○	
		S053	食事を挟まない		○	
S054	午前と午後で班を分離		○			
S06	ヘアメイクと衣裳	S061	手洗いや手指消毒 用品を再利用しない		○	
		S062	フェイスシールド		○	
		S063	ヘアメイク時間の倍化 →確保可能か		○	
		S064	ヘアメイク担当者の不安解消		○	
S07	美術と大道具	S071	用具を共有しない		○	
		S072	仕込み時間の分散		○	
S08	撮影中に感染が疑われる者が発生した場合の対応策	S081	速やかに隔離、最低48時間の経過		○	
S09	周知・広報	S091	感染予防を関係者へ周知		○	
S10	保健所との関係	S101	保健所の聞き取りに協力		○	
ポストプロダクション (撮影終了後)	PT1	関係者の健康状態確認	PT011	撮影終了から14日間の健康状態確認		○
	PT2	ポストプロダクション(編集)	PT021	社会的距離の確保		○
PT022	編集環境の事前確認				○	

こうした行動が周囲に不安を与えてしまうことや、学生の安全の確保が最重要であること、現在の感染状況下でどのような行動が適切かをチームに理解させつつ、学内や教職員には周知を行っておくことが重要である。

撮影終了後には関係者の健康状況の把握が重要である (PT011)。少なくとも新型コロナウイルスの潜伏期間である 14 日間 (当時) はスタッフ・関係者の毎日の健康観察と報告が必要であろう。本プロジェクトでは幸い感染の報告はなかったが、感染者、濃厚接触者となる可能性もあわせ、撮影終了後も不要不急の行動は控えてもらうようお願いした。

7. おわりに

本プロジェクトが対面授業許可申請を提出した際に痛感したのは、「コロナ禍の中においては、どの科目もやりたいようにはできていない」ということである。学生の安全を確保しながらも学びをあきらめないという相反の中で、筆者の中でも短編映画制作の撮影実習をあきらめるべきなのかどうか大きな葛藤があった。それでも取り組んでみようと思ったのは、本学が 2020 年 7 月 22 日付で学長名で共有した学内文書「2020 年度の本学の対応について〈第 7 報〉」の中に、学びを取り戻そうとす

(1) 学生にとっては、授業ばかりではなく、課外活動やキャンパス内での何気ない交流も大切な学生生活の一部です。前期中は課外活動は原則全て禁止とし、授業以外で学内に留まる時間を極力短くしてきましたが、今後は、できる範囲で制限緩和の方向とします。後期からは、感染リスクの低い活動で、顧問教員などの責任者の監督下で感染防止に確実に取り組める場合に限り、課外活動の再開を許可することとします。具体的なケースごとの対応や条件は学生委員会および事務局で決定して、学生に伝達してください

図 30 2020 年度の本学の対応について〈第 7 報〉より

る姿勢を感じたからである。感染拡大状況の深刻な地域では長期間のロックダウンを行っていた大学もあった。本プロジェクトが最後まで遂行できたのは、北海道が 2 回目の緊急事態宣言の対象に入らなかったことや、本学においてこれまで感染クラスターの発生がなかったことなどの偶然に依るところも多い。そのような中で最後まで遂行できたプロジェクトの事例であるからこそ、本稿が教育機関で感染予防型の撮影実習を行う上で参考となる資料となれば幸いである。

参考文献

- Yahoo!ニュース (2022 年 1 月 13 日) 「【図解】新型コロナ「第 6 波」急拡大「第 1 波」から振り返る」
<https://news.yahoo.co.jp/articles/83b58aeb9f1fe6beb04629925e2e66e1fb127eab/images/001> (2022 年 5 月 31 日アクセス)
- 厚生労働省 オープンデータ 「新規陽性者数の推移 (日別)」
<https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/open-data.html> (2022 年 5 月 31 日アクセス)
- 内閣官房新型コロナウイルス等感染症対策推進室 「基本的対処方針に基づく対応」
<https://corona.go.jp/emergency/> (2022 年 5 月 31 日アクセス)
- 北海道情報大学 新型コロナウイルス感染症に対する本学の対応について
<https://www.do-johodai.ac.jp/notice/> (2022 年 5 月 30 日アクセス)
- 北海道(2022) 北海道新型コロナウイルス感染症対策本部指揮室 これまでの主な対策等
<https://www.pref.hokkaido.lg.jp/covid-19/koronasengen.html> (2022 年 5 月 30 日アクセス)

PRONews [AfterCOVID-19 映像業界サバイバル]Vol.04 新型コロナウイルス感染予防ガイドラインまとめ (随時更新)

<https://www.pronews.jp/special/202006151320158328.html> (2022年5月31日アクセス)

一般社団法人日本映画製作者連盟 映画撮影における新型コロナウイルス感染予防対策ガイドライン (2021年5月14日策定) http://www.eiren.org/img/guideline_covid19_211014.pdf (2022年5月31日アクセス)

NHK 広報局 新型コロナウイルス感染を防止するためのドラマ制作マニュアルについて (2021年5月27日) https://www.nhk.or.jp/info/otherpress/pdf/2020/20200527_3.pdf (2022年5月31日アクセス)

NHK ドラマ スタッフブログ 新作ドラマ絶賛制作中！テレビ初！？のテレワークドラマ！ (2020年4月27日) <https://www.nhk.or.jp/drama-blog/7000/427996.html> (2022年5月31日アクセス)

シネマトゥデイ 行定勲,上田慎一郎,齊藤工…広がるリモート映画の取り組み <https://www.cinematoday.jp/news/N0116134> (2022年5月31日アクセス)

新型コロナウイルス感染症対策分科会 分科会から政府への提言 感染リスクが高まる「5つの場面」と「感染リスクを下げながら会食を楽しむ工夫」 (2020年10月23日) https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/ful/bunkakai/teigen_12_1.pdf (2022年5月31日アクセス)

北海道 新型コロナウイルス感染症に関する北海道におけるおけるレベル分類 (2021年12月8日) [https://www.pref.hokkaido.lg.jp/fs/5/2/8/9/1/5/1/_北海道におけるレベル分類\(全体版\).pdf](https://www.pref.hokkaido.lg.jp/fs/5/2/8/9/1/5/1/_北海道におけるレベル分類(全体版).pdf) (2022年5月31日アクセス)

謝辞

本プロジェクトを行うにあたり本学から多大な援助を頂きました。また学生の安全を最重要項目とし、一丸となって2020-21年度の新型コロナウイルス感染拡大期の困難を乗り越える原動力となった教務課および本学教職員の皆様にこの場を借りて深謝いたします。